

〈資料紹介〉

孫億筆『松鶴図』・『花鳥図』

津波古 聡[★]

琉球の絵画は中国や日本より画法を学び発達してきた。琥自謙・石嶺傳莫(1653～1703)や查秉信・上原真知(1666～1702)が中国福州に渡り、王調鼎、謝天游、孫億らに師事し、また、李基昌・東風平喜俊(1626～1687)は2度ほど薩摩に渡り、画技を習得している。その後、呉師虔・山口宗季(1672～1743)は、1704年に中国福州に派遣され、孫億、順梁亨、鄭大観について画法を学んでおり、それぞれに琉球の絵画の発展に寄与している。一方、家譜資料などを見ると中国や日本の画家の作品がかなり多く沖縄にもたらされており、これらの作品も何らかの形で影響を与えたと思われる。そのなかでも中国・福州の画家孫億は代表的な人物で、家譜資料(『那覇市史』家譜資料(久米系及び首里系)・那覇市企画部市史編集室)にも5点ほど彼の作品が登場してくる。直接的には師事していないが、孫億の画法は山口宗季を通じて琉球画壇の代表的な画家殷元良・座間味庸昌(1718～1767)にも受け継がれており、琉球画壇に与えた影響力が知れよう。

現在、沖縄県内で確認できる孫億の作品は「花鳥図」〔県指定〕(喜久村絜輝蔵)と「花鳥図」(県立博物館蔵)の2点であったが、今回新たに「松鶴図」と「花鳥図」の2点が当館に収蔵され、現在4点となる。なお孫億の作品は県外及び外国に数点現存する。(後述の一覧表参照)

『松鶴図』と『花鳥図』

福建省福州は文人画家が活躍した中心地である。江蘇省や浙江省に隣接しており、三省ともに東シナ海に面している。福州の画家孫億(1638～?)は長州(江蘇省呉県)の出身で字を惟鏞(惟年)、号は於山(于山)あるいは于峰道者と称した。花鳥草虫図がたくさんあり、山水人物をよくしたといわれるが、家譜資料やその他の資料によると花鳥図が多く見受けられる。職業画家としての一面をもちながら、反面教養も深く、技術的にもすぐれた画家だったようである。^(注)長州からいつごろ福州へでてきたか不明だが、1600年代末にすでに福州で活躍していたようである。福州での孫億はどのような画家であったか資料が少なく明らかではないが、石嶺傳莫、上原真知や山口宗季の家譜(比嘉朝健「琉球歴代畫家

(★つはこ さとし 沖縄県立博物館学芸員)

譜』『美術研究』第45、46号)よりある程度推測できる。家譜の記事は次の通り「二世傳莫 石嶺親雲上 尚貞王世代 康熙二十二年癸亥十月十八日奉命爲學繪隨從王舅毛氏池城親方安憲同十一月二十四日那霸開船同十二月五日入閩一中略一自同十二月十二日迄二十七日畫松竹菊花山水翌年甲子師王調鼎謝天游孫億員學圖畫留閩五年同二十六年丁卯五月十日

歸國。(『琥姓家譜』)(上原真知については傳莫とともに進貢使節の一員して渡閩しており、家譜の記事内容が類似するので略する。)

「九世宗季 山口親雲上 尚貞王世代康熙四十二年癸未九月二十四日奉旨者本國今無傳授之繪師而不足畫矣因茲使我到中華師學得圖畫來矣一中略一同十一月七日才府顧氏久志親雲上即辰附駕船那霸開洋漂着于海潭而翌年甲申三月二十九日至福州自四月五日師於同州第一之繪師孫億同州第二之師順梁亨及鄭大觀三子而到丁亥四箇年傳授祕法也(下略)(『吳姓家譜』)」

康熙22年(1683)、石嶺傳莫と上原真知が師事してから約20年後の康熙43年(1704)に山口宗季が渡閩した時にはすでに孫億は「福州第一の繪師」として位置づけられている。また、現存する作品が1680年代から1710年代に集中していることから、彼が最も活躍したのはこのころと思われる。そのころ、王調鼎や謝天游が生存してたかどうかは判明しない。

「松鶴図」は、その落款より1683年3月の制作であり、傳莫と真知が渡閩した年である。

絵は松枝に鶴が止まっており、左下の松葉の背景に竹の葉と梅枝が見られる。今までに見た孫億の作品とはかなり異なる絵であるが、これは売ることを目的にしたものかあるいは注文によるものと思われ、職業画家としての彼の一面をみることができよう。モチーフ自体ありふれた鶴に松竹梅の吉祥の図柄で



「松鶴図」

品質形状 絹本著色 掛幅装

法 量 本紙 縦123.6 横41.6

落款印章 大清康熙壬申春三月于山孫億

孫億印(白文方印)

惟鏞(朱文方印)

制作年 1683年

あるが、鶴の描写はかなり細かく表現されている。一見墨絵のように見えるが、鶴の羽と胴体は胡粉を用いており、梅の花心にも筆の先ほどの朱色が見られる。本品からは彼の力量を十分に知ることはできないが、職人的な手腕は絵の端々に見ることができる。現在でも本品とよく似た絵を見掛けるが、もともと中国では祝い事があるとこのような絵を掛けて祝福したと言う。その意味では興味深い作品である。また、職業画家としての一面を如実に物語る一例でもある。

一方、「花鳥図」は彼好みの図柄と言えよう。大きな白の牡丹と朱や紫の牡丹に雌雄一對の尾長鳥が描かれており、吉祥を意味する図柄と思える。黄金矩形に近い画面の対角線上に伸びる枝とその上に止まる雌雄一對の尾長鳥は全体を静的な画風にして

いる。彼が「花鳥図」を主に描き、職業的な面を持ちながら活動した背景には、福州が貿易の町として栄えていたことと福建省は古来より多くの花鳥図の画家を登場させたことにその要因があるように思われる。明末の自由で創造的な南宗画派が主流をなしていた中国の絵画は、清初のころよりしだいに個性的な画風は薄れていく。この変化は福州画壇へも影響を与えたと思われるが、その動静は明らかではない。



康七百五十五
孫億書

「花鳥図」

品質形状 絹本著色 掛幅装
法 量 本紙 縦 63.6 横 41.2
落款印章 康□乙酉孟夏于山孫億

□峰□者 (朱文方印)
孫億印 (白文方印)
□ (朱文方印)

制作年 1705年

孫億・謝天遊作品一覽表

*法量は縦×横

筆 者	作 品 名	法 量	所 蔵 者
孫 億	絹本著色・花 鳥 圖	82.5× 44.1	大英博物館
〃	絹本著色・牡丹鳥蟲圖	63.4×114.0	慈眼寺
〃	紙本墨画・三願一遇圖	71.0×127.7	京都国立博物館
〃	絹本著色・花 鳥 圖	147.0× 81.8	徳川美術館
〃	絹本著色・花鳥圖屏風(六曲一雙)	130.0× 54.7	〃 〃
謝天遊	絹本著色・青緑山水圖(双幅)	133.8× 65.8	永青文庫
孫 億	絹本著色・花鳥圖(雙幅)	130.7× 74.5	MOA美術館
〃	絹本著色・花 鳥 圖	48.1× 70.5	坂本五郎コレクション
〃	絹本著色・松 鶴 圖		江田勇二コレクション
〃	絹本著色・花 卉 圖		繭山龍泉堂コレクション
〃	絹本墨画・龍 圖	83.9× 50.6	本出精一コレクション
〃	絹本著色・花 鳥 図	90.5× 45.6	喜久村梨輝氏
〃	絹本著色・花 鳥 図	40.0× 55.1	沖縄県立博物館
〃	絹本著色・花 鳥 図	63.6× 41.2	〃 〃
〃	絹本著色・松 鶴 図	123.6× 41.6	〃 〃

※ この表は、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センターが昭和56～58年にかけて刊行した『海外所在中国絵画目録』(東南アジア・ヨーロッパ編)及び『日本所在中国絵画目録』(寺院編・博物館編・個人蒐集編)所収の資料に、沖縄県内に所在する作品を加えて作成したものである。

文 献

注) 林 進著・『沖縄の画家 山口宗季について』大和文華(第61号)大和文華館 1976年